

ーシンポジウム発表者レジュメー

人文学にもとづくカタストロフィの解釈・思考・表象

西山 雄二（首都大学東京・准教授）

2011年、日本社会は震災・津波・原発という、人類史上初の三重のカタストロフィ（破局）を経験した。破局的状況は、人間と自然、人間と文明、人間と歴史といった諸限界が露わになり、それらの概念や現実が根本的に再考される歴史的契機である。こうした災害に際して、自然科学や社会科学の研究者は具体的かつ実効的な支援や活躍をしてきた。人間の精神的活動を探究する人文学は、カタストロフィを前にして、いかなる学問的貢献ができるのだろうか。人文学が取り組むべきカタストロフィの論点は数多くあるが、本発表ではさしあたり、以下の基本的な論点を提示したい。

1) 概念——カタストロフィ (catastrophe) はギリシア語源では「転覆」を意味し、そもそも文学用語、とりわけ演劇用語（「大団円」「話の大詰め」）として必ずしも悲劇的な含意はなかった。18世紀頃から「悲惨で不幸な出来事」という否定的な意味のみで使用されるようになり現在に至る。人間と世界の関係をも示唆するカタストロフィ概念の変転を考察し、さらに、disaster（災厄）やrisk（リスク）といった隣接概念を比較検討する。

2) 虚構性——カタストロフィがそもそも文学的概念であった点を踏まえて、カタストロフィと虚構的現実の関係を考察すること。カタストロフィは想像しえない悲劇であるが（それゆえに）、逆にその表象は凡庸で通俗的なものとなる傾向がある。

3) 自然と文明——かつては自然災害が大量破壊をもたらしたが、技術文明が進展するにつれて、人為的要因こそがしばしばカタストロフィを引き起こしている。カタストロフィの要因は自然なのか、文明なのか、それとも両者の複雑な絡み合いなのか。カタストロフィの出来事は自然と文明の狭間にいる人間の営みを問いたす。

4) 時間性——カタストロフィは通俗的な歴史的な時間性を寸断し、予想外の出来事の到来はカタストロフィ以前／以後の切断を引き起こす。「もはやかつてと同じではありえない」「こんなことは二度と起こってはならない」と時間性が錯綜する。とりわけ、原発の事故収束や廃炉作業、拡散した核汚染物質の半減期などの時間も踏まえるならば、「3.11」の時間性はきわめて混乱している。